学びを深める児童の育成

～自分の思いや考えを伝え合う活動の充実を通して～

墨田区立第一寺島小学校
校長　髙橋　誠人

１　研究主題について

(1)　主題設定の理由

本校は、令和４・５年度に「『学びに向かう力、人間性等』を育む授業づくり～学びの実感が得られる授業～」を研究主題に、各教科で授業実践に取り組んできた。「学びに向かう力、人間性等」については、調査からも子供たちの力が十分についている成果が見られた。

一方で、「思考力、判断力、表現力」については、その資質・能力を発揮する活動に課題が見られる。具体的には、ペアやグループでの話し合いで思考を深める児童が少ないことや、考えを友達や学級全体に自信をもって発表できる児童が少ないことなどが挙げられる。そのため、研究主題を「学びを深める児童の育成」とし、副主題を「自分の思いや考えを伝え合う活動の充実を通して」と設定した。

研究主題の「学びを深める児童の育成」とは、教師が一方的に提示した課題を解決するのではなく、児童自らが学ぶ楽しみや価値を見いだし、主体的に友達や教材と対話しながら学びを深める児童と捉えた。

また、副主題の「自分の思いや考えを伝え合う活動の充実を通して」とは、具体的な子供の学習場面での活動を示している。平成 29 年度告示の学習指導要領解説　国語編によると、国語科の目標は「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とある。本校の副主題は、この国語科の目標の「言語活動を通して」というところに当てはまる。つまり、学習指導要領解説に示されている言語活動例に準じたり、その言語活動を充実させたりすることが本校の研究の軸になると考えた。

(2) 研究主題に迫るための手だて

①　言語活動の工夫

言語活動が、子供たちにとって課題を解決する過程であり、課題を解決することを通して当該単元で身に付けるべき資質・能力が身に付くような言語活動を設定した。また、単元の導入時に教師作成の言語活動モデルを提示したり、話し合いのモデル動画を見たりすることで、子供たちの「この学習が何の役に立つのか」「何のために学習をしているのか」という課題意識が、単元が始まるときから終わるときまで、途切れることなく続くようにした。

また、子供たちがその学習の価値や楽しさを分からずに、一方的に教師の話を聞いているだけでは資質・能力は育たない。学ぶ目的や意義を子供たちが実感できるような言語活動を設定した。

②　交流活動の工夫

今までは、学級全体での話し合いを教師主導で行い、物語や説明文を深く理解している数名の子供の意見に頼った授業を行うことがあった。授業後の板書だけを見ると、読みが深いように見えるが、子供たち一人一人が深い読みができるようになったのかは明確ではない。そこで子供たち一人一人が考え、一人一人の目的によって話し合いができるような交流活動になるように工夫をした。その際に「なぜ話し合うのか」「話し合う目的は何か」「話し合いによってどうなるの

か」について、子供たち自身が目的意識をもてるようにした。

また、１単位時間の中での交流活動の設定の仕方も工夫をした。従来は全体指導→一人学び→ペアやグループでの交流活動→全体共有という流れが多かったが、本当に子供たちが必要感をもって交流ができるかを考えたとき、上記のような形式ばかりではないと考えた。

子供たち自身の考えが形成されてから話し合いをしようとすると、ワークシートを音読し合うだけの話し合いになってしまうことがあった。そこで、話し合いをする際は、ノートやワークシートに自分の考えを書く前の段階に設定した。これにより、話し合うことで児童自身の頭の中が整理されて、その後の活動に生かすことができるようになってきた。

２　目指す児童像について

児童の実態を踏まえ、学びを深める児童の育成のために、目指す児童像を２学年ごとに設定し、学習指導要領の国語科と結び付けることで、本校の研究のねらいを達成できると考えた。

低学年	中学年	高学年
言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする子	言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする子	言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする子

３　研究の概要

(1)研究の方法

・校内研究の年間計画や研究主題について、児童の実態や前年度の課題を基に提案する。
・研究分科会や研究全体会を通して、講師の京都女子大学 教授 水戸部 修治先生から指導を受ける。
・全ての教員が低学年分科会・中学年分科会・高学年分科会のいずれかに属し、１回ずつ国語科の授業研究を行う。
・研究の成果と課題を研究する。

(2)研究授業の進め方

①研究授業に向けて授業者や分科会で「単元構想メモ」を作成する。
②実際の単元のゴールを考え、「言語活動モデル」を、分科会全員で考える。
③講師の水戸部先生に「単元構想メモ」及び「言語活動モデル」の指導を受ける。
④指導していただいたことを基に、学習指導案を作成する。
⑤単元の中でポイントとなる交流活動の、モデル動画を作成する。
⑤本時案を基に、校内の教員向けに模擬授業を行う。
⑥隣の学級で、本時と同じ展開で事前授業を行う。
⑦研究授業を行う。
⑧研究協議会を行う。
⑨講師の水戸部修治先生から指導・助言を受ける。

４　研究の実践

(1)低学年分科会　１年生の実践

①単元名　大すきな昔話を選んで、「どまんなかカード」をつくろう！
　教材名　「たぬきの糸車」（光村図書　１年下）

②単元の目標

・文の中における主語と述語との関係に気付くことができる。　〔知識及び技能〕（１）カ

・語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することができる。

〔知識及び技能〕（１）ク

・場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。

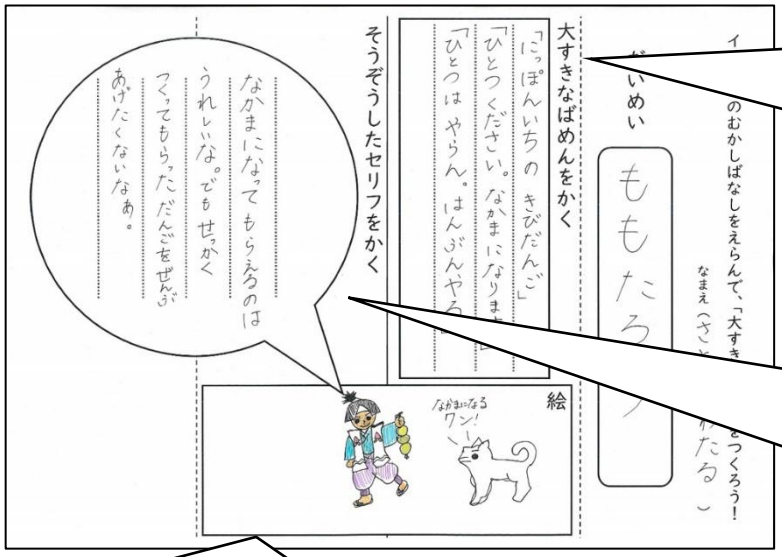
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｃ（１）エ

・「どまんなかカード」を作成するために、すすんで日本の昔話を繰り返し読んで、自分が好きなところを伝えることができる。　〔学びに向かう力・人間性等〕

③研究主題に迫るための手だて

ア　指導事項を明確にした言語活動の設定と言語活動モデルの作成

教師作成の言語活動モデル「どまんなかカード」



【大すきなばめんをかく】
大すきな一冊の中で特に心のどまんなかにきた場面を、本文から見付けて書く。絵もかく。C(1)エ

【そうぞうしたセリフ】
大すきな場面を選んだ理由を考えるために、絵に「マイふきだし」をつけてセリフを想像する。くりかえし声に出したものを、ふきだしの中に書く。C(1)エ

【絵】大すきな場面の様子を絵で表す

イ　目的を明確にした交流活動の工夫

子供たちが主体的に話し合いを進めることができるように、自分で交流する相手を選び、思いや考えを伝え合わせるようにした。また、子供たちは確定した考えを発表し合うのではなく、話し合いを繰り返すことで考えを形成するようにした。

ウ　個別最適な学びを成立させるための教材の工夫

単元のゴール（「大すきな一冊」を紹介する）を示した後で、日本の昔話の絵本を 60 冊用意し、子供たちが手に取りやすい場所に並べておく。朝読書の時間や休み時間等、隙間の時間に自由に読むことができるようにしておくこととした。

(2) 中学年分科会　第４学年の実践

①単元名：「生き物について説明されている科学的読み物を読み、『フォースタグラム』を作って、友達に紹介しよう」

②単元の目標

・考えとそれを支える理由や事例など、情報と情報との関係について理解している。

〔知識及び技能〕（２）ア

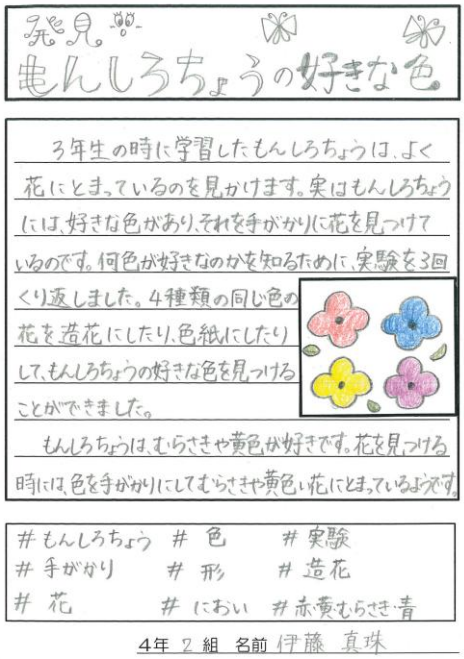
・目的を意識して、中心となる語や文を見付けてようやくすることができる。

〔思考力・判断力・表現力等〕Ｃ（１）ウ

・「フォースタグラム」を作成するために、進んで科学的読み物を繰り返し読んで、自分が興味をもったところを伝えることができる。　〔学びに向かう力・人間性等〕

③ 研究主題に迫る手立て

ア　指導事項を明確にした言語活動の設定と言語活動モデルの作成


発見
もんしろちょうの好きな色

3年生の時に学習したもんしろちょうは、よく花にとまっているのを見かけます。実はもんしろちょうには、好きな色があり、それを手がかりに花を見つけているのです。何色が好きなのかを知るために、実験を3回くり返しました。4種類の同じ色の花を造花にしたり、色紙にしたりして、もんしろちょうの好きな色を見つけることができました。

もんしろちょうは、むらさきや黄色が好きです。花を見つける時には、色を手がかりにしてむらさきや黄色い花にとまっているようです。

#もんしろちょう　#色　#実験
#手がかり　#形　#造花
#花　#におい　#赤黄むらさき青

4年 2 組 名前 伊藤 真珠

題名・タイトル

自分が一番面白いと思ったところを中心に、文章中の語や文と関連させながら、伝える相手を意識して小見出しを作成する。

〔C 読むこと　ウ〕

一番伝えたいところの説明

どうして面白いと思ったのかを、文章全体を正確に把握した上で、説明をする。その際、その理由にとって重要な語や文と関連させながら説明する。また、説明するためには、元の文章の構成や表現をそのまま生かしたり、自分の言葉を用いてまとめたりする。

〔C 読むこと　ウ〕

ハッシュタグ

自分が面白いと思ったことを説明するために必要な語や文を本文中から抜き出して書く。

〔C 読むこと　ウ〕

イ　目的を明確にした交流活動の工夫

一人一人が選んだ本について、自分の伝えたいことが十分に伝えられるかどうかを交流の目的とした。また、交流の手順を説明し進め方を確認することで、スムーズに交流をすることができていた。

ウ　個別最適な学びを成立するための教材の工夫

育てたい資質・能力が発揮されるような科学的読み物を、先行研究や教科書の例を参考に教師が 14 冊選書した。子供たちは「フォースタグラム」を作成するために、一人一人が興味をもった科学的読み物を選ぶことができた。また、読むことが苦手な児童に対応できるように、文字数の少ない本や写真や図が多い本を選ぶことで、個に応じた学習ができるようにした。

(3) 高学年分科会　第６学年の実践

①単元名：「立松和平の表現する命について、自分の考えをもち友達と話し合おう」

②単元の目標

・作品中の結びつきの強い語句動詞が相互に関連し合い、文章の内容を特徴づけていることに気付くことができる。　〔知識及び技能〕（１）オ

・「海の命」や「山の命」等を読み、「命」に関わる様々な表現が読み手に与える効果について自分の考えを明らかにし、暗示性の高い表現、作品から伝わるメッセージや「命」を強く意識させる表現などに着目して読むことができる。

〔思考力・判断力・表現力等〕C（１）エ

・読書座談会において、「立松和平の表現する命」について互いの意見や感想の違いを明らかにしたり、互いの意見や感想のよさを認め合ったりすることができる。

〔思考力・判断力・表現力等〕C（１）カ

・進んで「命」について考えさせられる作品を何度も読み、言葉のもつよさに気付くとともに、「命」に対する自分の疑問を解き明かすために、考えを伝え合おうとすることができる。　〔学びに向かう力・人間性等〕

③研究主題に迫る３つの手立て

ア　指導事項を明確にした言語活動の設定と言語活動モデルの作成

本単元では、読書座談会で一人一人が話題にしたい内容をグループで考えを深める言語活動を設定した。読書座談会の目的は、友達と交流し考えを広げたり、深めたりすることとした。同じ作品を読んだもの同士でグループを形成し、その中で、様々な考え方や感じ方に触れることによって、自分の読みが広がったり、深まったりすることを実感させていきたい。物語の読みを通して、強く心に響いたことを自分の言葉で相手に伝えたり、相手の読みを受けて考えを述べ合ったりすることを目指した。

教師作成の言語活動モデル動画（読書座談会）

命シリーズの本を読み、様々な表現が読み手に与える効果について自分の考えを明らかにすることや、暗示性の高い表現、メッセージを意識させることで、「精査・解釈」の力を付け、読書座談会を成立させていくことで、「共有」につながると考えた。

イ　目的を明確にした交流活動の工夫

一人一人が選んだ本について、自分が読書座談会で話題にしたいこと（例　どうして太一はクエを捕まえなかったのだろう？　どうして千匹に一匹なのだろう？等）を解き明かすことを話し合いの目的とした。

ウ　個別最適な学びを成立するための教材の工夫

本単元の言語活動は、立松和平シリーズを複数読み、立松和平の表現する命について考えを伝え合う活動である。そのため、立松和平の複数の作品（命シリーズ）を全文シートにまとめ、話し合いの際に全員が手元にあるようにし、複数の作品を比べられるようにした。

５　まとめと今後の課題

⑴ 研究の成果

・質の高い言語活動を設定することで、子供たちが見通しをもって意欲的に学習に参加することができるようになった。
・教師が単元前に言語活動モデルを作成することで、当該単元で必要な資質・能力を具現化することができ、指導の際に的確な助言や支援ができるようになった。
・話し合い活動の設定を柔軟に扱うことにより、子供たちが目的をもって、必要なときに話し合い活動をすることができた。
・目的やめあてがはっきりしている話し合い活動を行うことで、学びを深めることができ、当該単元の育てたい資質・能力の向上に結び付けることができた。
・教科書教材の他に、複数の関連図書を準備することで、自分の興味関心や一人一人の読む力に合わせた教材で児童が学習を進めることができた。
・教科書教材で学んだ資質・能力をすぐさま自分が選んだ本で発揮することができるため、生きて働く学習になった。

⑵ 研究の課題

・話し合いをするときに、目的に応じて自らが相手を探す学習になっている。主体的に行動をしないと成立しない場合があり、いつも受け身の児童には支援が必要であった。子供たちが迷うことなく学習を進めるために、話し合いのモデルをさらに具体的にする必要がある。
・国語科の言語活動を通して学んだ力（自分の思いや考えを伝えあうこと）を他の教科でも活用できるように広げていく必要がある。そのために、目的や指導事項を明確にした話し合いのモデルを作成することが次年度の課題である。
・今年度の研究授業や研究授業以外の国語科の取組を学年ごとにまとめ、いつでもどの学年でも活用できるように、データの整理が必要である。